

VII-38

地域資源「木流堀」の保全に向けて

東北工業大学 正員○松山 正将・同 菊地 清文・同 花淵 健一・同 佐伯 吉勝
同 中居 尚彦・椭圆元技術コンサルタント 阿部 和正・東北学院大学 平吹 喜彦

1. はじめに 日本の産業や工業の集積に基盤をおいたこれまでの経済発展は、私達の所得を増大させ、都市の利便性を飛躍的に向上させた。しかし、一方では地価の高騰、生活の質の劣化、水や緑の自然環境の喪失とヒートアイランド現象の顕在化など、解決の糸口の見えない複雑な問題を生起させてしまっている。また、海外においても工業の衰退にともない、かつて繁栄を極めた多くの都市が荒廃の危機に瀕しており、脱工業化社会の環境基盤をどのように創りだして行くのかを模索中と判断される。

このような状況のなかで活力を回復しつつある都市に共通する視点は、都市の歴史・文化・自然の持続性をふまえて、市民との協働を基本に政策展開を行っていることが示唆される。仙台市においても都市再生の取り組みを展開中であるが、どのような道筋で人の生活の場を回復し、同時に失われた自然環境を再生して行くのかという原点は、いまだ明確に示されていないと思われる。著者らは、これら諸問題の解決に結びつく糸口として広瀬川流域の潜在力すなわち数億年かけて形成されてきた地形、水、そしてこれらが育む緑地環境に着目し、豊かな環境の回復を核とした地域づくり・まちづくりを進めることが必要と考えている。

本報告は、その試みとしてスタートさせた「木流堀」の現況調査内容について述べるものである。

2. 「木流堀」 現在の木流堀は、図-1に示すように名取川と広瀬川を結ぶ全長約6 kmの水路となつて

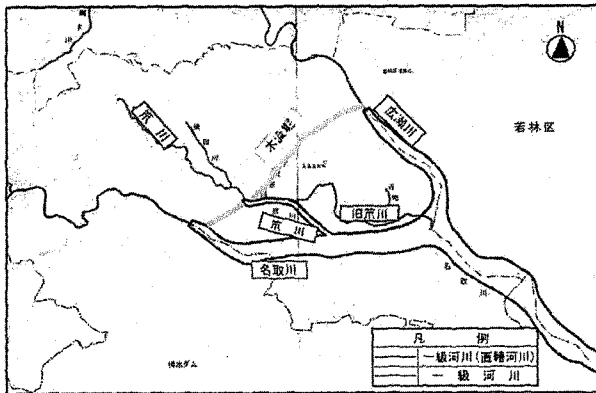


図-1 木流堀位置

おり、広瀬川に注ぐニッ沢、金洗沢、富沢川、後田川集水域と荒川に注ぐ集水域で形成されている。水路管理者は、仙台市、宮城県、東北農政局、名取土地改良区等複数で構成されている。

木流堀に集水され広瀬川に注ぐ流域面積は、ニッ沢（1.6 km²）、金洗沢（2.9 km²）、富沢川（1.1 km²）、後田川（1.3 km²）で合計約6.3 km²となっている。これら沢や川と呼称されているが、流路はすべてコンクリート三面張の排水路である。



図-2 「名取郡北方根岸村・平岡入会絵図」1822（文政5）年6月

図-2は藩政当時の絵図で、木流堀と周囲の位置関係を示したものである。木流堀はその名前が示すとおり、仙台藩の燃料となる薪を城下に運ぶために造られたもので、工事着手は1596（慶長1）年名取川富田から広瀬川間といわれている。仙台の流木（ながしき）には、長町御木場廻御流木（名取川・木流堀）と角五郎御木場廻御流木（広瀬川）の南北二箇所を設置され、家臣等への供給を担当していたようである。

3. 現況踏査結果 図-3に木流堀全長水路の現況調査結果の概要を示す。

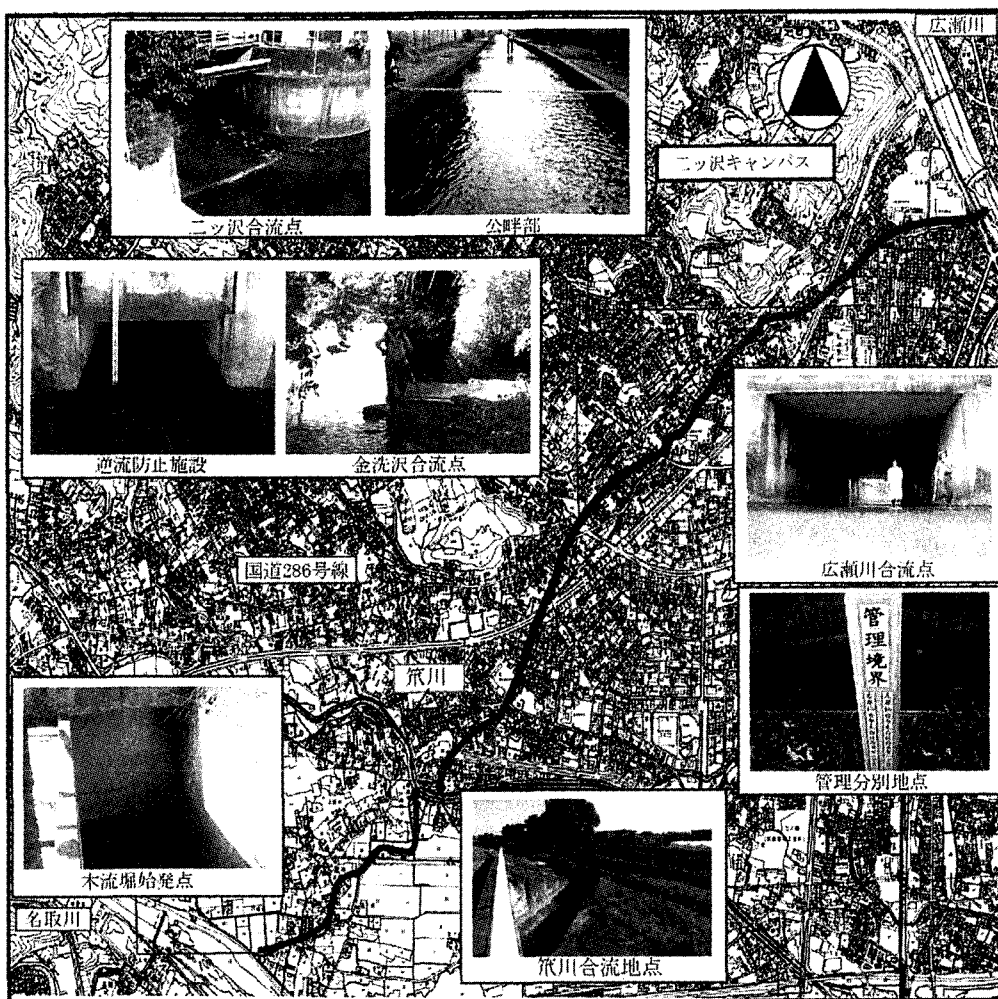


図-3 「木流堀」水路の現況

4. おわりに 現況調査から、広瀬川から沓川までの約4.2 kmの現水路位置については、旧木流堀位置とほぼ同じと判断されたが、沓川から名取川間の約1.8 kmについては、沓川の河川改修工事や農業用水路整備工事等の地形改変が顕著で確認できず、調査を継続している。

水路構造は、集水域の各沢や川と同様全域コンクリート三面水路となり、雨水等の排水機能に徹したものととなっており、その占有空間約2 haは親水空間とはかけ離れたモノとなっている。しかし、木流堀の集水域であるニッ沢、金洗沢、富沢川、後田川各流域の雨水等の保水能力を高め、緑環境や水環境を豊かに改善して行くことで雨水流入量が通減され、水路に余裕空間を形成できる可能性も示唆された。木流堀の親水性を高めるには、遠回りではあるが先ず住家が集積されている金洗沢流域とニッ沢流域の環境調査からはじめることとし、調査をスタートさせている。

なお、これらの現況調査には、研究室4年生菊地宏明、遠藤直樹、黒田元喜の三君の協力を得た。

4. 参考文献等

大竹誠一、「長町木場に就いて」、仙台郷土研究、復刊第一巻第2号、pp40～45、1976年9月